



平和の灯火よ、永遠に！

② 松輪島（千島）からシベリアへ

昭和二十年八月十五日、私は千島の松輪島で終戦を迎えた。松輪島では何度か艦砲射撃を浴びせられ、また、空爆にも見舞われた。敵はことごとく米軍であったが二十五日、突如ソ連兵が上陸してきた。

一か月ほど経った九月二十六日、私たち守備隊はソ連の船で松輪島を離れた。船は北海道へ向かっていると信じていたが、着いたところはソ連のソフガワニ港。初めは、そこがどこののか全く分からなかった。

上陸後、巨大な貨車に七十人ずつ乗せられ、松輪島から持ち込んだ背嚢をそれぞれ

敷きつめた上に座った。車両の中は、とても窮屈だった。列車は間もなく煙をはき出しながら出発した。燃料は石炭ではなく薪で、火の粉を激しくはき出しながら、時々ピーピーと汽笛をうるさく鳴らしながら走行した。

途中、停車したとき、背嚢をのけてみると車両の下に穴があげられ、我々が持ち込んだ全ての物が盗まれていた。それは飯盒や水筒などで、まさに手当たり次第であった。当時ソ連は思っていたよりも貧しい国だったのだ。

列車はたびたび止まり、約三十五時間を費やして一三〇収容所に到着。そこで第九、第十中隊を主力とした約五百人が下車を命ぜられ収容された。九月三十日、小雨が降って冷え冷えと夕闇のせまった午後五時ごろと記憶している。

鉄道沿線に点在した幾つかの収容所を転々と移動しながら、様々な作業、ノルマに

※艦砲射撃：軍艦に備え付けた大砲で、目標を砲撃すること。

※背嚢：革やズックなどで作った、物品を入れた兵士などが用いたリュックカバン。

※飯盒：19ページの注を参照。

※ノルマ：51ページの注を参照。

追いたてられた。

収容所

収容所は、直径八〇センチメートル、高さ五メートルほどの丸材をびっしり連ねた柵に囲まれ、その外側数メートルに有刺鉄線が張りめぐらせてあった。柵内には、これから私たちが生活する丸太づくりの、粗末な建物が何棟か、寒々と並んでいた。宿舎内は粗末なものだ。二段に厚板が敷かれ、窓も少なく、それも小さくて明かりが入りにくく、じめじめしていた。

班ごとに僅かなスペースが割り当てられ、戦友とごつごつした体を寄せあった。そこがその夜からの、私たちの寝ぐら、住まいとなったのである。十月一日夜、ソ連側から初めて食事が支給された。粟だったと思う。どろどろにたき込んで、食油と塩で味付けしたものが飯盒のふたに軽く一杯、それに黒パンが少量。

食事が支給され出すと作業も始まった。

作業は山林の伐採、鉄道工事など幾つかのグループに分かれて行われた。

作業場でソ連人から初めてかけられた声は、「ダワイ、ダワイ（急げ急げ）」だ。時には、こぶしを振り上げて「ダワイ」と怒鳴ってくる。

抑留者の誰もがこの「ダワイ、ダワイ」でこき使われた。

帰国後、五十数年経った今でも、耳の底にはりついて、忘れることのできないロシア語が、この「ダワイ、ダワイ」だ。

機関車用の薪割り

私が最初に割り当てられた作業は、蒸気機関車用の薪割りだった。直径三十〜四センチメートルのエゾ松、シラカバなど何でもよかった。立木を手当たり次第に切り

※有刺鉄線：とげのついた鉄線。

※粟：イネ科の一年草。アジアに広く栽培され、やせ地でもよく育つ。

※飯盒：19ページの注を参照。

※伐採：53ページの注を参照。

倒し、一メートルずつにきざんで二つ割りにするのだ。

手斧を使うのも初めての私は、時には空振りをして自分で自分のひざ小僧を割りそうになり、肝を冷やしたこともあった。一メートルずつに切った丸材を台の上に立て、それに力いっぱい斧を打ち込み、丸材ごと頭の上まで持ち上げ、斧を下にして勢いよく台に打ちつける。そうすると、振り下ろす力に丸材の重さも加わって、その丸材はサクッと割合簡単に二つに割れる。水分をいっぱい含んだ丸材はかなり重く、一日労働を終えて宿舎に戻り寝台に横になると、膝や腰、肩に激痛が走った。

一日のノルマは、確か一人一立方メートルだったと思う。当時はまだ健康体だったので、早々に作業を終了し、定刻前に宿舎に引き上げていた。ところが、それが裏目に出てしまい、ノルマは間もなく一・二立方メートルに上積みされてしまった。

収容所生活に入って一か月ほど経つと、寒さもいよいよ本格的になった。寒さに耐

※ノルマ：51ページの注を参照。

※立方メートル：体積の単位。一辺が一メートルの立方体の体積に等しい体積。

えていくだけでも大変なエネルギーを消耗する。吐く息もあつという間に凍ってしまった。日ごと疲れが溜まってきたある日、恐れていた事故が発生してしまった。それも死亡事故が遂に起きてしまったのだ。衰弱した隣の中隊の兵隊が、伐採作業中、倒れてきた大木を避けきれず下敷きになったのだ。体力の衰えが、命取りになってしまったのである。

その夜、宿舎内の全員で通夜を営んだ。位牌が作られ、大根の味噌漬け数切れが霊前に供えられた。供物はそれだけだった。運よく宿舎に僧職の方がいたので、仏様にお経をあげることができた。

読経のものの悲しい声を聞きながら、私たちはこれから、どうなっていくのだろうという不安とともに、終戦後の様子が少しも分からない故郷の状況、肉親や友人たちの消息などを心配しながら、手製のランプの僅かな明かりの中にうずくまり、額を寄せあつての心細い通夜となった。

昭和二十年暮れも押し迫ったある日、これまでシベリアで一度に大量の降雪を見る

ことはほとんどなかったが、その日は思いがけない大雪で、三十センチメートルも積もり、道路らしい道路もすべて雪で埋まってしまった。鉄道線路がただ一つの交通網で物資の補給路なのに、線路が埋まってトロッコが引けなくなり、食糧の補給ができなくなつた。

当時、収容所に支給される食糧は、毎日一日分ずつ（土曜日は二日分）、数キロメートル離れた地区本部にある倉庫まで、ロシア人担当者に引率されて何人かで受け取りに出かけていた。しかし、その日は食べ物がかつたので、作業は休みになつた。何もすることがないので仕方なく雪を溶かして湯を沸かし、それをすすり、空腹をまぎらわしながら宿舎の中でごろごろしていた。この先どうなるのだろうかと思うと、何とも心細い長い長い一日であつた。

※伐採…53ページの注を参照。

※位牌…死んだ人に付ける名を書いた木札。

※僧職…僧としての身分・職務。坊さんのこと。

※トロッコ…線路の上を走る四輪の車で、石炭や砂利などを運ぶためのもの。

身体検査

時々身体検査が、とても変わった方法で行われた。身長、体重、視力などを測定することも、医師が聴診器で胸や背中を診ることもない。

医師は二度三度、おしりの肉をつまんで健康状態を判断し、一級は重労働、二級は通常作業、三級は軽作業、四、五級はオペといつて休養させるグループに分けられた。身体検査のたびに收容所を転々と移動させられ、それがそのまま編成替えとなつて、戦友たちと離ればなれになつた。

そして、いつの間にか收容所内は、樺太、満州（現中国東北部）などから連行されてきた軍人軍属、満州からは開拓団など、各地から様々な境遇、環境にあつた人たちの集まりになつた。

こうした中で、食べ物、たばこなど、つつい他人の物に手を出してしまうという事件が起こってしまった。

抑留後、初めて身をもって知つた恐怖ともいえる寒さと、四六時中の心もとないひ

もじさで、私^{わたし}たちは、体力とともに思考力、物事に対する善^{ぜん}悪^{あく}の判断力^{はんだんりよく}さえ失いかけていたのだ。

バラス降ろし

疲れ^{つか}きつた体を横たえ、夜毎^{よごと}見る夢^{ゆめ}……。遠い故郷^{こきやう}の懐^{なつ}かしい山^{やま}や河^{がわ}。それともい
としい妻^{つま}の黒髪^{くろかみ}の香り^{かお}、かわいい子供^{こども}たちの赤いほっぺの微笑^{ほほえみ}。私^{わたし}たち独身^{どくしん}者は、
あんこのはみ出しそうな大福餅^{だいふくもち}の山……。そんなひと時の安らぎの中、遠くからズシ
ーンズシーンと重く、それでいてリズムミカルな列車の近づく音が伝わってくると、皆^{みな}
が一斉^{いっせい}に目覚め、闇^{やみ}の中の一点を見据^{みす}え、息を殺して列車の通過^{つうか}を祈^{いの}った。

しかし、収容所^{しゅうようじょ}の近くでドツドツドツ、キーキーとブレーキがかけられて列車が止
まり、ピーピー汽笛^{きふえ}が吹き鳴らされると、いつの間にか現^{あらわ}れた作業監督^{かんとく}がむちを振り

※軍属^{ぐんぞく}：軍人以外で軍隊に勤務する者の総称^{そうしやう}。
※バラス：バラストのこと。道路・鉄道線路に敷く小石。

回し、

「ダワイ、ダワイ（急げ急げ）」

とわめき散らしながら、宿舎内を早足で歩き回っているのだ。

列車は何両編成だったろうか。大きな五十トン積みの貨車は、バラスをいっぱい積んできており、私たちは日常の作業にプラスして、そのバラス降ろしの作業に駆り出されるのだ。

たいてい機関車は後ろ向きで車両を引っばってきており、その機関車のヘッドライトの明かりを頼りに作業は進められる。扉のくさびの抜き取りから作業は始まり、つるはしの片方をくさびの底に当てがい、片一方をハンマーで叩き上げるのだが、重いバラスがずっしりと扉を押し、くさびはなかなか抜けなかった。

カーン、カーンと金属が金属を叩きつける脳天に突きささるような甲高い音が、車両の数だけ線路に響き、まだ明け切らない天空にこだまし消えていった。

バラス降ろしの作業は、結局、鉄道線路の仕上げ工事が完了するまで続いた。それ

を降ろす作業に駆り出され、作業を終え疲れきった体を引きずるようにして、声もなく帰途に着くころ、ようやく東の空が白みかける。宿舎に戻って落ち着く間もなく、また一日の作業が始まるのだった。「ダワイ、ダワイ」と。

鉄道工事

地面にじかに枕木を置き、その上にレールを並べただけのような鉄道の仕上げ作業が、私たちが収容された地区の主な作業だったようだ。

レールを、何人かで持ち上げ、私たちが動員されて台車から降ろしたバラスを、打ち込み押し込み、もつと大勢で金棒を線路の下に差しこみ、

「せーの」

「よいしょ」

と、一斉にレールを右に振り左に戻し、みごとに鉄道工事は仕上がっていった。そし

※バラス：79ページの注を参照。

て、この間まで火の粉を激しく吐き出しながら走っていた機関車、列車は、石炭で勢いよく走るようになった。

塩分の全くなかった三日間

伐採、やぶ出し作業に従事していた時のことだ。

三日間、全然塩分のない食事しか支給されなかったことがあった。

塩分の補給が一日途絶えた。二日目になると、もう体がいうことをきいてくれない。毛穴、汗腺が紫色にはれあがり、身体中の皮膚がザラザラして自分の体が自分で不気味だった。三日目になると、右、左、片方ずつ両手で持ち上げてやらないと足が前に出なくなるようになり、口を利くのもおっくうになった。そんな状態の中で、「早く、

※伐採…53ページの注を参照。

※やぶ出し…山で切り倒し六メートルずつに切断した丸材を、馬にひかせた二輪車に細い方を鎖でくくり付け、馬の尻をたたき、山を下って道路に面した集積場まで運び出す。

早く帰りたい故郷に」という思いだけが、思考力などひとかけらもなくなった頭の中でクルクルと、ただクルクルと回って止まらなかった。

塩分の全くなかった三日間は、すでに弱っていた私たちの体力、気力を更に失わせ、栄養失調症状をどんどん進行させてしまった。しかし、それでも肉体労働のノルマは続いた。まさに拷問を受けているのと同じだった。聞けば、私たちに塩分が全然支給されなかった三日間、収容所で使っていた馬にはけっこう岩塩が与えられていたようだ。ソ連人にとって、私たちより馬のほうが大切だったということだ。

石鹼水を飲む

独身者の私たちは、ひもじく寒く、毎日の作業が辛く苦しいので早く帰りたいのだが、年配者、所帯持ちの方々は、敗戦後の家族肉親縁者の安否消息、家業、生活のことが気がかりで、その心労は大変なものようであった。

本格的なダモイ（帰国）が近く、それも体力の衰えている者から順にという情報が

入ってくると、早く帰国したい一心で石鹼水を溶かして飲む者がいた。

「そんなことをしたら死んでしまうぞ」

と言うと、

「日本に帰れなければ、死んだ方がまし」

と言い飲んでしまう。すると便所にしゃがみこんだまま動けなくなり、体内の水分が出てしまい脱水状態になって弱っていく。

しかし、身体検査の当てが外れると、石鹼水をあおった者は体力の急激な衰えと共に、本当に帰れるのだろうかと精神的にも参ってしまう。無理にそんな身体にしては、シベリアでの回復は難しい。

極寒の日々

銀粉をまき散らすようにチカチカ光を放ちながら寒さが降ってきた。吐く息がすぐ

※ノルマ…51ページの注を参照。

氷の粒つぶになってまゆ毛について白くなった。呼吸こきゅうのたびに鼻から白い息が棒ぼうのように現あらわれては消えた。

朝、目が覚めたら、同室どうしつの同僚どうりょうが冷たくなっていた。会話をしている静かになつたと思つたら、がくと首を落として死んだ。寒さが厳まじしくなるとともに死者は増ふえていった。

病院で死んだ者は、解剖かいぶ、縫合ほうごうしたあと埋葬まいざうされた。病院に送る便がないと何日も宿舎しゆくしゃの出入口の隅すみに何体もの凍こった遺体いたいが積まれていた。背筋せしんの凍こるような光景こうけいだつた。シベリアの冬は、衰弱すいじやくしきつた私たちの身体なまに情け容赦ようじやなく、おそいかかつてきた。

いつも腹はらがへっていた。過酷かこくな労働ろうどうのノルマと監視兵かんしへいの構かまえた自動小銃じゆうじゆうの銃口じゆうこうに追われ、猛烈もうれつな寒さにおびえながらの毎日まいにちだつた。

頭の中は食べ物のことと、「帰りたい、早く、一日も早く」の思いのほかは何もなかつた。

約六万人もの戦友、同胞が、本当に無念の思いで亡くなった。どんなにか、どんなにか、心を残しての最期であったことか。

しかも未だに、万を越す死没者の遺体が、広大なシベリアの山野のどこかに放置されたままと聞いている。

戦争は終わったのにどうして、なぜ、殺されなければならなかったのか。戦争は遠くなくなってしまった。しかし、シベリア抑留の悲劇、惨劇、その真実は永久に消えることはない。

（原作 平原敏夫 「回想 シベリア抑留記」）